

講 演

聖書に学ぶ —— 倫理神学の源泉としての聖書 ——

竹 内 修 一

今日は、僕の専門の「倫理神学」(moral theology)の観点から、聖書について一緒に考えてみたいと思います。また、両者が、本来いかに大切な関係にあるかについても確認してみたいと思います。

倫理神学とは

「倫理神学」という表記は、主にカトリックの中で使われます。一方、プロテスタントにおいては、「キリスト教倫理」という表現が一般的だと言われます。両者は、まったく同じではありませんが、ほぼ同様のものと考えていいかと思います。ですから、例えばアメリカの大学では、よく moral theology / Christian ethics という表記がなされています。

私たちは、キリスト者であってもそうでなくても、同じ現実世界に生きています。ですから、そこで出会う問題は共通しています。例えば、一週間程前、北海道で地震がありましたが、その影響を受けたのは、同じ土地に住んでいるすべての人です。しかし、問題そのものは共通のものであっても、それをどう見るか、それはその人の立ち位置によって異なります。

このような共通の問題を神との関係で見る時、それはどう見えてくるのか。また、その問題をどのように解決しようとするのか。言い換えれば、さまざまな倫理的問題を神学的観点から見る時、それがどのように見えてくるのか。そのことを考察するのが「倫理神学」である、と言っていきたいと思います。

大きな本屋さんに行きますと、分野別にさまざまなセクションが用意

されています。例えば、宗教のセクションに行きますと、(中には怪しげなものもありますが)主だった宗教のカテゴリーで分けられています。また、哲学や倫理などのセクションに行きます。そこには多くの専門家による本が陳列されていますが、それらは、ほとんど宗教色のないものです。これが日本の現実です。

確かに、倫理的問題を考察するにあたっては、必ずしも神の存在を持つてこなくてもいいでしょう。人間共同体のレベルで考えることができます。このような考え方を、例えば、イメージとして横軸(X軸)とします。しかし、そこにさらに縦軸(Y軸)を措定してみます。つまり、それが人間と神との関係です。自分は、この二つの軸が交わった所に生きている。そのような見方をするとき、たとえ目の前の問題は同じであっても、見え方は変わってきます。「倫理神学」は、そのような見方・考え方をするもの、と考えていいかと思います。

皆さんのお手元にレジユメが配られているかと思います。それをこれから一緒に読みながら、コメントを加えて行きたいと思います。それぞれの文章は、僕がかつて書いたものです。

1. 人間の現実

矛盾を孕みながら生きて行く

人間は常に矛盾を孕みながらも、幸福を目指して生きて行く。「神の似姿」(創1:27)として造られた人間は、本来、善そのものへと向けられ自らのいのちを形造って行く。しかし同時にまた、「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」(ロマ7:19)と語られるように、自らのうちに分裂した自分を見出す。これが人間の現実であり、倫理神学が対象とするのは、まさにこの人間である。社会的存在としての人間には、当然、人間として守るべき道がある。それを神との関係において捉え直すとき、「倫理神学」(moral theology)は始まる。その根本は、いのちそのものとしての神の愛を確認し、イエス・キリス

トをとおして与えられた招きに応え、キリストの道を歩むことにある。

「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」(ロマ7:19)。ロマ書は、パウロの最晩年の手紙です。そのことを考慮すると、このパウロの言葉は、いっそう現実的なものとして響いてきます。彼の呻吟は、彼の祈りとも言えるのではないかと思います。彼は、この言葉を吐露する前にさまざまな経験をします。何度も獄に繋がれたり、死にかけたりしています。それは、いのちがけでイエスの福音を伝えようとしたからです。彼のこの言葉に対して、少なくとも聖書の中では、イエスは何の応えもしていません。しかし、もしかしたら、こう語ったかもしれません——「それでいい。そのままでついておいで。」

人間の不完全さ

ある時、次のような言葉に出会いました——「何故、人間は不完全なんだろう。」「不完全」とは、いったいどういう意味でしょうか。例えば、「弱さ」や「欠点」という言葉で置き換えることができます。普通、人は、そういうものを隠しがります。特に思春期の頃は、ひりひりするくらいそういったものに敏感だと思います。コンプレックスと言ってもいいかもしれません。容姿のこと、健康のこと、勉強のこと、家族のことなど、実にさまざまな問題があります。「これさえないければ、私はもっといいのに……」といった時の「これ」です。一番親しい友達にも、なかなか話すことができません。

しかし、そもそも、完璧な人間などいるのでしょうか。僕自身は、想像することもできません。

実は、このような弱さや欠点は、とても大切なものだと思います。なぜなら、それによって、自分と誰かが深い関係を結ぶきっかけとなるからです。ある時は助けられ、ある時は自分が誰かを助けることもあります。また、そのような時、人間は、真に謙虚な存在になります。

パウロは、自分の弱さを通して神の恵みが注がれる、と語っています(2コリ12:7-10参照)。ロマ書においては、さらに大胆な言葉で語ります。「罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました」

(5:20)。人間の世界では、パラドックスです。人間の論理では、つじつまは合いません。しかし神の論理では、それが真理です。

これまで、いろいろな人と出会ってきました。その中には、僕に大きな影響を与えてくれた人も何人かいます。しかし、そのような人もまた、決して完璧な人間ではなく、さまざまな弱さや欠点を持っていたはずです。そこでわかるのは、人間が不完全であることと、その人が善い人間であることは、決して矛盾・対立しない、ということです。つまり、弱さや欠点があっても、人間は、善い人間になれますし、また、それを望むこともできるのです。

聖書のどこにも、イエスは、「あなたが完璧な人間になったら、私について来なさい」とは語っていません。不完全なままでいいのです。マタイの福音書の最後には、大変興味深い話が語られています。それは、復活したイエスが山の上で弟子たちと会い、彼らを派遣する場面です。

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタ 28:16-20)。

「イエスに会い、ひれ伏した」と語られた後、「しかし、疑う者もいた」と語られます。この期に及んでも、イエスを信じきれない弟子たちがいます。これが、人間の現実です。しかし、イエスは、そのことを問いただしません。むしろ、彼は、そのような彼らを派遣します。思うに、私たちがイエスを信じる前に、彼の方が私たちを信頼している、ということでしょうか。これが、神の現実です。

2. 人間の尊厳

「かけがえのなさ」と「ありがたさ」

人間の尊厳とは何か——この問いに対して、簡潔・明瞭に応えることは、それほど簡単ではありません。

尊厳について、例えば『広辞苑』を繙けば、「とうとうおごそかでおかしがたいこと」とあります。間違っていないでしょう。でも、ストーンと自分の中に落ちてこないのも事実ではないでしょうか。たとえそれが正しくても、それがそのまますべての人に理解されるというわけではありません。これが現実です。

尊厳とは何だろう——そう考えていた時、二つの言葉が落ちて来ました。一つは「ありがたさ」であり、もう一つは「かけがえのなさ」です。「ありがたさ」とは、「有り難し」からくるのでしょう。ですから、「滅多にない、極めて稀だ」ということです。例えば、現在、地球上には約76億人の人間がいるそうです。ですから、数字の上では、自分は76億分の1の存在です。そして、自分の隣りにいる人も、家族の一人ひとりも、みんな76億分の1の存在です。この状況において、二人の人の出会う確率は、76億分の1×76億分の1となり、その数は果てしなくゼロに近い数字になります。出会わなかった確率は、ほとんど百パーセント。でも、現実に出会っている。極めて稀な出来事です。

「かけがえのなさ」とは、代わりがないということです。例えば、皆さんのお手元のレジュメですが、そこに書かれていることはみな同じです。しかし、僕が手にしている紙と、皆さんが手にしている紙とは違う存在です。このように、情報のコピーは可能ですが、存在のコピーは、論理的にもあり得ません。

あるいはまた、一卵性双生児の方を考えてみましょう。二人のDNAは同じです。でも二人は、まったく別の人格を持った存在です。つまり、DNAのコピーはできても、存在のコピーはできないのです。かけがえがないとは、そういうことでしょう。

聖書における人間の尊厳の根拠

人間の尊厳の根拠は、聖書においては、次の二点を指摘できるかと思

います。

- ①「神の似姿」(*imago Dei*) : 「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」(創1:27)。
- ②「いのちの息」 : 「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻にいのちの息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(創2:7)。

子供は、自分の意志に関係なく、何らかの点で両親に似ています。それは、生物学的に見たとき、親の遺伝子を受け継いでいるからです。私たちは、例外なく、それぞれ神の遺伝子を注がれています(しかもそれはよいものとして)。「神の似姿」とは、そのように考えられるのではないか、と思います。

また、人間は、神の息が注がれているかぎり生きます。この世で死ぬとは、文字通り、この息が注がれなくなることです。つまり、息を引き取ります。「息」と「生きる」とは、通底しています。

「人間のいのちの始まりはいつか」、また「終わりはいつか」、といった問い掛けもあります。簡単には応えられない問題です。ある人は、それぞれを点として考えるかもしれませんが、別の人は、プロセスとして捉えます。確かに、私たちは、たとえ死ぬときになっても、人間として完成するわけではありませんから、いつもプロセスの途上にいる、と考えることもできます。

ある時、次のような言葉に出会いました。We are only dust—but beloved dust. 「人間はほんの塵に過ぎない。しかし単なる塵ではなく、愛された塵である」となるのでしょうか。何に愛されているかと言えば、それは「神に」です。あまりにも当然だから、省略されています(詩編90:3, 104:29, ヨブ10:9参照)。

この言葉を紹介する時、いつも次の言葉を思い出します——Boys be ambitious! (少年よ、大志を抱け)。皆さんご存知のように、クラーク博士の言葉です。しかし、この言葉には続きがあります。それは、次のようになります——Boys be ambitious in Jesus Christ! です。つまり、その

意味は、「少年よ、イエス・キリストにおいて、大志を抱け」となります。もし、in Jesus Christ がなければ、「少年よ、野心家になれ」といった意味にもなります。人を蹴落としてもいいから、とにかく自分第一に生きよ、といったこととなります。しかし、in Jesus Christ を措定したならば、そんなことにはなりません。明治政府は、最も大切なところを切り捨てたのです。日本の教育の一つの現実です。

3. いのちの輝き

存在は善である

トマス・アクィナスは、こう語りました——*Ens est bonum: Being is good* (存在は善である)。何かがあるということは、それだけでよい、ということです。どのようにあるか、それは後の問題です。あるいは、良いからこそ存在している、と言ってもいいでしょう。『知恵の書』には、次のような言葉があります——「あなたは存在するものすべてを愛し、／お造りになったものを何一つ嫌われない。憎んでおられるのなら、造られなかったはずだ」(11:24)。

創世記の冒頭を思い出します。「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた」(1:3-4)。存在の肯定です。神の創造の営みは、五日間、同じパターンで書かれます。そして六日目には、人間が創造されます。そしてこう続きます。「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。」(1:31)。「極めて良かった」と語られます。

聖書において、初めて否定的な表現が出て来るのは、次の箇所です。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」(創2:18)。神にとって、人間が一人ぼっちであるということは、忍びないことなのです。

一人ぼっちとは、孤独ということです。今この国では、少し減りましたけれども、年間約三万人弱の人が、自死・自殺しています。これは実際亡くなった方の数ですから、悩んでいる人はその何倍いるかわかりません。おそらく、そのような方々には家族がいるだろうと思います。自

分にとって一番近い存在である家族にさえも、自分の苦しみを打ち明けられない。それは窒息と言ってもいいでしょう。窒息とは死です。このような現実を見ると、はたしてこの国は、本当に健康で平和な国なんだろうか、と思います。

『運命の子』

最近、『運命の子 トリソミー——短命という定めの子を授かった家族の物語』という本を読みました。13トリソミー（染色体異常）の問題を抱えた子供とその家族のドキュメンタリーです。著者は、小児外科医の松永正訓先生です。その子は、^{ただし}朝陽くんというのですが、^{あさひ}生まれたときは、男の子か女の子かも判別がつかなかったそうです。片方の指は六本あって、耳はつぶれている。松永先生は千葉大学の先生だったんですが、ご自身が病気になり千葉大を辞め、クリニックを開業します。開業してまもなく、ある総合病院から、朝陽くんの面倒みてくれないかと頼まれ引き受けます。普通、13トリソミーの子供は、だいたい一年くらいで亡くなってしまうそうです。ですから、先生も、朝陽くんは長くは生きないだろう、と考えたそうです。ところが、一年経っても朝陽くんは生き続けます。その後、朝陽くんがどうなったかは書かれていませんが、最後に、お母さんの一言が記されていました——「この子のおかげで、家族って何かがわかりました。」そういった体験をした家族です。

世間では、一般的に、「生産性」が求められます。朝陽くんには、そのようなものはなかったかもしれません。しかし、生きる意味は、ありました。

4. 倫理とは何か

秩序の息遣い

生きるということには、秩序が求められる。それをここでは、「倫理」と呼ぶことにしたい。「倫理」という言葉は、しかし、一般的にはどのような印象を人々に与えるのだろうか。もしかしたら、それは、義務や規則・規範といった言葉かもしれない。

だとすると、倫理的な生き方とは、それらに従って生きることとなる。その場合、倫理は、何か人間の自由を抑制・拘束するもの、換言すれば、何か否定的なものとして理解されることになる。しかし果たして、それが、倫理の目指すべき本来のあり方であろうか。むしろ倫理とは、それによって私たちが、いっそう自己の涵養へと導かれ、より良い社会の形成に寄与すべきものではないだろうか。

「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」(ロマ7:19) — これは、先ほど紹介したパウロの言葉です。まさに生身の人間の現実です。そのような人間を、どうして法や規則・規範だけで捉えることができるのでしょうか。確かに、ある人の行為について、正・不正の判断はできるかもしれません。しかしそれ以上に大切なのは、なぜその人がその行為をしようとしたのか、その動機・意図の確認であり、その心の状態^{ありかた}ではないでしょうか。

カトリック倫理の歩み

カトリックの倫理神学は、約二千年の歴史があります。実に長い歴史です。ですから、いい時もあればそうでない時もありました。第二バチカン公会議(1962-65年)は、カトリックの歴史の中でも、最もすぐれた公会議の一つだと言えます。事実、この公会議によって、カトリック教会は刷新されました。

倫理神学も、例外ではありません。17世紀からこの公会議までの倫理神学は、一般的に、マニュアル倫理神学と言われます。つまり、そこで求められる倫理は、人間の行為を中心としたものであり、マニュアルに従うことが求められました。具体的な行為の表面を見て、それが良いか悪いかの判断をします。法・ルールに適っているかどうか、問われました。

何かを学ぶとき、確かに、マニュアルは役立ちます。しかし、現実には、いつもマニュアルだけですべてが理解・解決される、というわけではありません。そのような時にどうするか、そこでの判断力が問われます。

キリストに倣う

イエスは、そのような人間のありのままの姿を知っていました。彼の生涯は、いのちそのものである神を自らにおいて示すこと、そのことに尽きました。「わたしは道であり、真理であり、いのちである」(ヨハ 14:6) — そう彼が語るとき、私たちは、彼の中に人間としての生き方を見出します。イエスは、学問体系を構築したのでも、また、抽象的な教条を義務として私たちに課したのでもありません。むしろ、彼は、そのような事柄から私たちを解放し、そのために自らのいのちを賭けました。彼は、私たち一人ひとりがいかに神の目に価値あるか、そのことを自らのことばと行いをとおして示したのです。

「キリストに倣う」(*Imitatio Christi*) — これが、キリスト教倫理の初めであり終わりです。それゆえ、「キリスト教倫理とは、キリストの道を歩むことである」と語るエルサレムのキュリオスの言葉は、正しい。たとえ、パウロのような劇的な回心を体験しなくても、それは問いません。キリスト者となる道は人それぞれであり、そこにこそ一人ひとりの召命の意義があります。真のキリスト者となること、それは、確かに容易なことではないでしょう(マタ 7:13, ルカ 14:33 参照)。しかし、イエスと労苦をともにするならば、その喜びにも与ります(2 コリ 7:4 参照)。しかし同時にまた、私たちの中に常に揺るぎない確信がある、というわけでもありません。依然として、私たちは、弱く不確かな存在であり、たとえ誠実であろうとしても過ちを犯しうる人間なのです。

カトリックの倫理思想は、これまで(もちろんいつもではありませんが)、二つの大きな過ちを犯してきました。一つは倫理と霊性の分離であり、もう一つは聖書から乖離した倫理です。そしてその結果生まれたのが、いわゆる、キリスト不在のキリスト教倫理です。第二バチカン公会議は、しかし、再び「キリストに従うこと」(*Sequela Christi*) という標語のもとに、倫理神学の刷新に努め、改めてその根本的立場を確認し提示しました。それは、キリスト中心主義、すなわち、キリストによって、キリストとともに、キリストのうちに結ばれる、神と人間との人格的關係の再確認です。

倫理神学の刷新にあたっては、とりわけ二人の倫理神学者が、大きな貢献をしました。一人は、ベルンハルト・ヘーリング(Bernhard Häring:

1912-98, レデンプトール会)であり、もう一人は、ヨーゼフ・フックス (Josef Fuchs: 1912-2005, イエズス会) です。二人は、僕にとってはヒーローです。

5. いのちの書としての聖書

聖書は、広い意味で「いのちの書」である、と言えます。なぜなら、そこにおいて神は、自らを「いのちそのもの」として表明しているからです。さらに、聖書は、私たちが具体的に生きるにあたって、さまざまなインスピレーションを与えてくれるからです。

「神はいのちそのもの」——これは聖書の根本的使信の一つです。「生ける神」(ヨシュ 3:10, 詩 42:3, 民 14:21, エレ 22:24, エゼ 5:11)としての神は、人間を死のためではなく、生きるためにこそ造られました(知 1:13-14, 2:23)。あらゆるいのちの根源は、神にあります。すなわち、いのちは創造主である神からの賜物であり、この点にこそ、いのちの尊厳があります。それゆえ神は、いかなるものの死も喜びません(エゼ 18:32, 33:11)。

このいのちの源である神が、独り子をこの世に遣わされました——イエス・キリスト。イエスは、わたしたちに永遠のいのちをもたすために(マタ 19:16)、しかもあふれるほど与えるために(ヨハ 10:10)来られました。イエスはいのちの言葉(1ヨハ 1:1)、いのちのパン(ヨハ 6:35)であり、彼の中にこそいのちはあります(1:4)。それゆえ、彼を信じる者は死んでも生きる、と言われます(11:25)。このいのちは、彼の死を通して私たちに与えられますが(10:11, 17-18, 1ヨハ 3:16)。イエスは、感覚的な目では見ることのできない神の体現です。それゆえ、誰でもイエスを見た者は父を見ることになります(ヨハ 14:9)。イエスはまた、旧約におけるのと同様のことを主張します。「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である」(マコ 12:27)。

次に、このいのちが愛であることを確認したいと思います。「友のために自分のいのちを捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハ 15:13)。愛はいつも他者との関係において体現されます。「いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたし

たちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内であつとうされているのです」(1ヨハ4:12)。

愛はまた、本質的に共同体に関連しています。愛のあらゆる源は、聖霊における父なる神と御子との親密な関係にあります。神はイエスを通して、世界とまた人間と関わります。神の愛は、イエスにおいて体现されました。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(ヨハ3:16)。人間が人間として生きるにあたって、愛は必要不可欠です。それゆえイエスは、次のように語ります——「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(13:34)。これは彼が私たちに与えられた新しい掟であり、彼の遺言でもあります。

6. 良心

倫理と霊性の邂逅の場

いのちの考察にあたっては、良心についての理解が、大変重要な位置を占めています。

良心は、人格的存在としての人間の深奥に生得的に刻み込まれている。それは存在論的に人間存在を根拠づけ、倫理的に人格の成長を促す。「善をなし悪を避けよ」——これはわたしたちに対する良心の要請である。良心は、ただ単に、正・不正や善・悪の識別・判断に尽きるものではなく、むしろ、人間が人間として生きるための根本的な^{ありかた}状態を開示する。それゆえ良心において、人間は、自らの究極的根源(神)の声を聞き、それに従えることができる。良心はまた、人間に求められる二つのこと——善い人間であること(倫理)と聖なる人間であること(霊性)——の邂逅の場でもある。

「良心」は、十九世紀になって日本に取り入れられた言葉です。この言葉は、孟子(前372-前289)に遡ることができます。もちろん、それ以前の日本人には良心がなかった、と言うわけではありません。その系譜

は、清明心（古代）→正直^{せいちよく}（中世）→誠（近世）→良心（明治以降）といった流れになります。

明治になって、さまざまな西洋文明・文化が取り入れられますが、その中の一つに conscience という概念があります。これを何という言葉で置き換えようか、といった議論があったのですが、結局、「良心」という言葉に落ち着きました。つまり、西洋の概念を中国の言葉によって、この日本で翻訳したのです。ですから、当然、そこには意味のズレがあります。今日は、そのことについて詳しく語ることはできませんが、私たちが、普通良心という言葉聞いて理解しているところを踏まえて話を進めたいと思います。

普通、良心について考える時、特に人間を超越した存在を考える必要はないでしょう。しかし、ここでは敢えて、そのような存在との関係において、良心を理解してみたいのです。まず、X 軸と Y 軸をイメージしていただけますでしょうか。X 軸は、特に、そのような超越的存在を措定しない一般的な倫理 (ethics/morality) です。一方、Y 軸は、さらにそこに超越的存在を措定した霊性 (spirituality) と考えていいかと思えます。

第二バチカン公会議 (1962-65 年) は、そのような良心について、次のように語ります。

人間は良心の奥底に法を見いだす。この法は人間がみずからに課したものではなく、人間が従わなければならないものである。この法の声は、常に善を愛して行い、悪を避けるよう勧め、必要に際しては「これを行なえ、あれを避けよ」と心の耳に告げる。人間は心の中に神から刻まれた法をもっており、それに従うことが人間の尊厳であり、また人間はそれによって裁かれる。良心は人間の最奥であり聖所であって、そこでは人間はただひとり神とともにあり、神の声が人間の深奥で響く。良心は感嘆すべき方法で、神と隣人に対する愛の中に成就する法をわからせる。良心に対する忠実によって、キリスト者は他の人々と結ばれて、ともに真理を追求し、個人生活と社会生活の中に生じる多くの道德問題を真理に従って解決するよう努力しなければ

ならない。正しい良心が力をもてば、それだけ個人と団体は盲目的選択から遠ざかり、客観的倫理基準に従うようになる。打ち勝つことのできない無知によって、良心が誤りを犯すこともまれではないが、良心がその尊厳を失うわけではない。ただしこのことは、真と善の追求を怠り、罪の習慣によって、しだいに良心がほとんど盲目になってしまった人にあてはめることはできない（『現代世界憲章』16項）。

「良心の奥底に法を見いだす」と語られますが、この法を「自然法」と言います。それは、次のように表されます。*Lex indita non scripta* (Law inscribed [in the human heart] and not written down). 「自然法とは、文字によって書かれた法ではなく、〔人間の心に〕刻み込まれた法である。」そこで語られる（囁きかけられる）声に従うこと、そこに人間の尊厳を見ます。良心は「聖所」であり、それゆえ、他の誰も踏み入ることのできない、神とその人だけが会いまみえることのできる、そのような場です。

ときどき、「良心の声は神の声」といった言葉も聞きますが、もう少し丁寧に言うならば、「良心は、そこにおいて神の声を聴くことのできる、そのような場である」となるでしょうか。その意味での良心の声に従うのは、単に主観的な理解や思いに従う、といったレベルのものではありません。つまり、そこには普遍性があります。

このような理解の確からしさを求めていた時、ジョン・ヘンリー・ニューマン (John Henry Newman, 1801-1890) の著作に、同様の考えを見出しました。これは僕にとって、とても大きな喜びとなり支えとなりました。ニューマンは、英国国教会の司祭でしたが、後にカトリックに転向しました。さらにその後、彼は、枢機卿に叙せられました。彼の影響は大きく、オックスフォード運動と呼ばれ、多くの人々が、彼とともにカトリックに転向しました¹。

良心については、まだまだ語りたいことがあります。今日はこれで

¹ 彼は、2019年10月13日、教皇フランシスコによって列聖された。

終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

（付記：本稿は 2018 年 9 月 15 日に行われた藤女子大学キリスト教文化研究所主催の公開講演を文章化したものです。）

